

大都の城壁は十一門、二頭六臂両足の哪吒を象ったという 元大都城遺跡(土城)

【参考書】陳高華著 佐竹靖彦訳
『元の大都 マルコ・ポロ時代の
北京』中公新書 七三一
中央公論社(1984年)
(写真撮影 2005年3月7日)

西土城路に残る元の城壁

北京に初めて大規模な都城が設けられたのは、元代のことです。一般に元の大都と呼ばれていました。その元の大都が哪吒を象ってつくられたのではないかと、詩文や随筆が今に伝わっています。

『農田余話』には「燕城(大都)は劉太保の制を定むるに係わり、およそ十一門、哪吒神の三頭六臂両足にかたどる。」とあります。

大都の城壁には十一の門が設けられていました。南側に三門、東側に三門、西側に三門、北側に二門です。南が三門、北が二門というのは、対称性が重んじられる中国の伝統からいえば奇妙なことです。即ち、哪吒の三頭六臂両足の南の三門が三頭を、東西の六門は六臂(六本の手)を、北の二門は両足を象っているといわれています。

また、『張光弼詩集』卷三の「輦下曲」には「大都の周遭は十一門、韋韋土築の哪吒の城、讖言すらく若し磚石もて裹めば、長しえに天王甲兵を衣るに似たり。」とあります。土築と記されている様に、元の城壁は土を固めただけのものです。したがって大雨が降ると土砂が流出して崩れたそうです。1283年から十年間のうちに、大規模な城壁補修工事が八回も行なわれました。「輦下曲」の作者は土築の問題点を知りながらも、「もしも大都の城壁に土ではなく煉瓦が敷かれたなら、戦いの神毘沙門天王が鎧を着たことになり不吉だ。」と述べているのです。

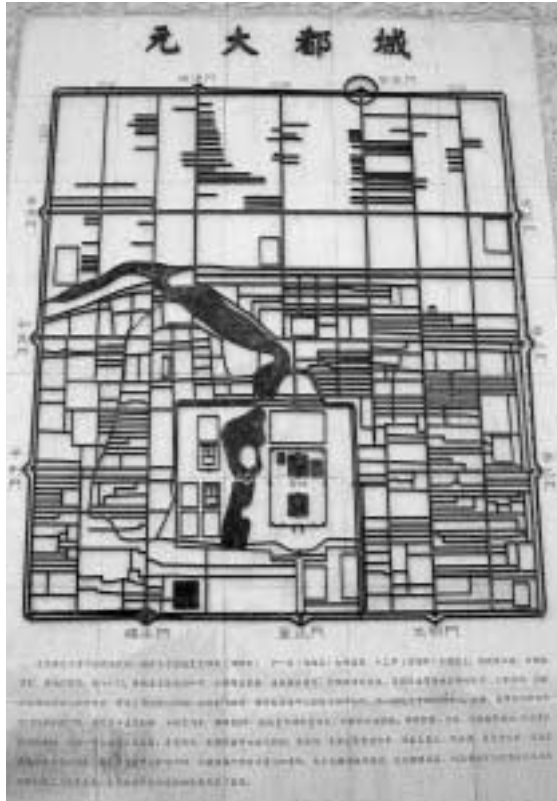
代の周囲2.8kmの城壁うちの北側の一部で、現在の北京の北部、三環路と四環路の間の朝陽区桜花園東街の中日友好病院の北から海淀区土城路付近まで東西に続く一帯に残っています。

また、元大都城遺跡は1957年に政府より重点保護区に指定され、改修が行なわれ、一部が公園になりました。公園には元の大都の最盛期の姿がオブジェで再現されています。公園の全長は約4.2km、幅100×160m。元土城遺跡、土城溝水系、沿線緑化帯があり、城垣懐古、薊門煙樹、天台擁翠、銀波得月、水閣新意、鞍纏盛世、燕雲牧歌、薊城新象の8つのスポットが見所です。

観光客には馴染みが薄い史跡ですが、市民の憩いの場所になっています。



元大都城遺跡公園に残る元の城壁



公園内にあった元の大都の図の碑石。門は十一門あります



元代っぽい(?)公園のオブジェ



公園として綺麗に整備されています



お塚の向こうはかつての城外なのでしょう